

【岩手県】

◆組合員インタビュー



いわて生協 水沢コープ理事
佐々木 世津子さん
(写真、左から2人目)

仮設住宅などで暮らす方々が作る商品を多くの方に購入していただければ、多額ではありませんが現金収入が生まれます。また、生協と取引のある沿岸部の産地も被害を受けましたが、組合員として愛着のある商品が元のように生産できるようになってほしい気持ちも強くあります。これからも、商品の利用と販売のお手伝いを続けていきたいです。

◆復興へ、前へ前へ



いわて生協スローガン。

いわて生協では、「がんばろう! 岩手」をスローガンに、組合員の協同の力で被災した組合員・地域を支援し、岩手の復興に貢献する輪を広げ、岩手を復興させていくという思いで、日々活動しています。

2012. 3. 11

東日本大震災から1年がたった3月11日。多くの生協で、組合員・職員・協力団体・地域がつながりました。

【いわて生協】

震災から1年を迎え、いわて生協では3月8～11日の4日間にわたり、「がんばろう! 岩手セール」を実施しました。売り場には、「復興応援商品」として地元の生産者やメーカーの商品が数多く並び、注目を集めていました。

また、いわて生協の12店舗のうち9店舗では、被災した方々の手作り品や沿岸部の特産品を組合員・職員のボランティアが協力して販売する「復興応援商品コーナー」も開設されました(左欄上、関連記事掲載)。

コープ Aterui (奥州市) では「復興応援商品コーナー」が店舗の入り口正面に設けられ、大盛況でした。買い物をされたご夫婦は、「支援の気持ちで購入したということももちろんありますが、沿岸部の商品は、商品としても魅力的です。産地は大変だと思いますが、必ず復興してほしいです。心から応援したいです」と話していました。



「復興応援商品コーナー」には、多くの人が立ち寄っていた。



商品を作られた方の案内。

【みやぎ生協】

3月11日、みやぎ生協蛇田店では、野菜コーンラーメンの振る舞い企画が行なわれました。これは、みやぎ生協が参加する「食のみやぎ復興ネットワーク」が主体となつて行なつた企画で、3月8～11日に、被災地や応急仮設住宅周辺のみやぎ生協店舗10店舗にて、食品メーカーさんを主とした26団体のご協力のもと行なわれました。蛇田店では、サンヨー食品(株)さんがインスタントラーメンを、はごろもフーズ(株)さんが缶詰のコーンとウズラの卵を、みやぎ生協がほうれん草とバターを提供。買い物に来た組合員に約300食を振る舞いました。子どもたちと4人で来た組合員の後藤幸恵さんは、「子どもに喜ばれそうなトッピングのラーメンをいただき、家でも作れるのでいい参考になりました」と話していました。他店でも、カレーライスや野菜ちゃんぽんなどが振る舞われ、多くの人でにぎわっていました。



熱々のラーメンが振る舞われた。



このような振る舞い企画は度々行なわれている。

【宮城県】

◆組合員インタビュー



みやぎ生協組合員
阿部 幹夫さん

震災直後から店を開き、食品を提供してくれて感謝しています。生協が一番いいのは、品質のいい品物を提供してくれることです。私の震災被害は家の一部損壊でしたが、港にあった会社が壊滅的な被害を受けました。被災から1年たちましたが、会社はまだ復興途上で、来年の再開に向けて頑張っています。生協はこの1年の間に何回もタオルのような日用品や食品の配布をしてくれるので、被災から立ち直る皆の役に立っています。

◆復興へ、前へ前へ



みやぎ生協スローガン。

みやぎ生協では、震災フレーズ「悲しみを乗り越えて ともに歩もう ー希望 未来ー」を3月12日より「ともに歩もう 築こう未来 = 協同・たすけあい =」と新たに、日々活動しています。

【コープふくしま】

3月11日、コープふくしまの全店舗で、おたのしみレシート番号くじ、まる得ポイント5倍サービスなどが実施されました。また、コープふくしまは、毎月11日を「いきいきコープ復興応援デー」と定め、売り上げの1%を、子育て応援や除染活動のために役立ててほしいと地域の市町村へ寄付しています。さらに、エントランスでは、原発撤廃などを訴える署名活動を展開、みんなで取り組みたいという思いから、従業員が交替制で組合員に署名を呼び掛けました。これらの取り組みはすべて、この日のために、コープふくしまの従業員全員で考えてきたものです。

原発や放射能の問題は、震災から1年たった今も解決のめどが付きません。しかし、すべての人の願いはひとつ、安心して住める「福島」を取り戻すこと。そのために希望を持って共に前へ進んでいきたい、そんな決意を新たにしたい一日となりました。



おたのしみレシート企画も、職員の発案。



署名をする来店者。

店長インタビュー

震災1年を経て思うことについて、被災地3県の店長にお聞きしました。

いわて生協 コープAterui (岩手県奥州市)
統括店長 北島 正氏



「奥州市から沿岸部まで1時間半。バスボランティアは当初は盛岡からだけでしたが、奥州市からもバスを出し、沿岸部でのボランティア活動に取り組みました。組合員の方々も職員同様、支援への気持ちは強く、積極的な参加がありました。『復興応援商品コーナー』もご好評いただき、地域の方々の(被災地を)支えていこうという気持ちを強く感じています。これからも未永く支援を続けていきます」

みやぎ生協 蛇田店 (宮城県石巻市)
店長 伊藤 勝巳氏



「振る舞い企画には、日曜日にもかかわらず、多くの食品メーカーの社員さんが参加してくださいました。『お役に立ててうれしい』という熱い気持ちが伝わってきます。この企画は生協だけのものではなく、生協と地域、メーカーさんと心をつなげた復興祈念の事業です。生協の事業は、仕事だけではなく、交流して支え合うことが大切なのです。これからも、こうしたつながりを大切に、力を合わせて復興していきたいと思えます」

コープふくしま コープマート方木田店 (福島県福島市)
店長 河原 信彦氏



「訪れる組合員の顔ぶれは、1年前と大きく変わりました。原発周辺に住んでいた方が福島市内に引っ越し、顔なじみの組合員が放射線を恐れて出ていったためです。放射線は20年、30年と引きずる問題。福島では皆、言い知れない不安や恐怖を抱えています。買い物するほんの束の間でも、それを忘られる店舗を目指したいです。このままでは若い人がただ出て行くだけの場所になってしまう。安心して暮らせる福島を早く取り戻したいです」